

千刈狸の呟き

初めて列車に乗ったのが何才の時、どこへ誰と行ったのかは全く思い出せない。微かな記憶にあるのは駅で大泣きをしたことである。青洩を垂らしていたことで、母狸にひどく叱られて置き去りにされるのではないかと思ったからだった。幼稚園に入る前のことだったように思う。

次に記憶にあるのは、初めてディーゼル車に乗った時のことである。この時はもう青洩は垂らしていなかった。母に連れられて母の友人の住む由仁町へ行った時のことである。隣の夕張市にある公園に出かけた。乗せられた車両は煤けた茶褐色ではなく、明るいクリーム系の色で塗装され、窓は広く車内は明るかった。何よりも煙をモウモウと吐く機関車はついていなかった。

やがて列車は聞き慣れたポオーと腹に響く汽笛ではなく、軽やかと言うよりは気の抜けたファンと言う音を鳴らしてスルスルと走り出した。これは汽車ではなく、ディーゼルカーと言うのだと教えられた。

幼い時からの思い出といえば、どこかへ出かけた事が多くなる。その移動はほとんどが鉄道・汽車であった。高校時代の後半は、片道1時間半近くの汽車通学であった。電化される前なので、乗るのはディーゼルカーであっても汽車通学であった。これは全然嫌ではなかった。車内ではもっぱら数学の問題集をやり、疲

～ 狸と鉄道 ～

洩 垂 狸

れると窓の外を眺めていた。

遠くに山が見える日は嬉しかった。あの頃は吾狸にとっては遥かなる山であり、勝手に夕張山系だと思い込んでいた。

国鉄（日本国有鉄道）は、首都圏を除けば唯一の国民の足としての役割を担っていた。自家用車が普及するまで旅客は増え続け、若者達の旅行ブームは鉄道を利用してのことで鉄道ブームでもあった。しかし、国鉄の経営は常に問題を抱え、赤字は膨らみ、ついに分割民営化の断行に至った。これで問題が解決された訳ではなく、営利企業としての株式会社である以上、赤字路線がそのまま見逃される筈がない。ほとんどの地方路線が赤字であり、廃線の危機に晒されている。ある小さな路線が廃止されると、それに接続する路線の赤字はさらに増大する。車を持たない子供や高齢者など、所謂、交通弱者が住めなくなる地域は拡大し、地方はますます衰退していく。

鉄道があることの意味を考え直してほしいと思う。金持ちにしか手の届かない豪華な観光列車があっても良いが、国民の誰もが利用できる公共交通機関としての鉄道、移動の自由と交流の喜び、自然や風土を体験し、豊かな人生を送るための重要なインフラストラクチャーとしての鉄道を見直してほしいと切に願うのである。